

平成24年5月5日発行(毎月5日1回発行)
第52巻5月号(通巻634号)

風土



5

花吹雪
神蔵器

願成就院二句

御仏の説法印や辛夷咲く

なかんづく阿弥陀如来の春灯

春一番二番三番花吹雪

椿咲く政子の井戸の水鏡

流れゆく水より青し葱一本

反射炉に鑄口焚口雀の子

春満月いろはにほへとちりぬるを

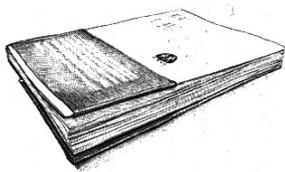
朝桜茹でる卵のをどりだす

天平雛男が買うてゆきにけり

青郵の命に向かふ雪椿

耳の日のありても母のこゑ聞かず

かげろふに杖をとられし仏かな



竹間集

同人作品



雀右衛門

小林清之介

雀右衛門の葬儀春雪しきりなり
合羽坂百間旧居に彼岸鵞
小綬鶏の遠音まねれば犬唸り
片方がまた伸び春のちんば眉
春深し男も倦まぬ長ばなし
春延々（京都「テレビ画像」
我と同名なりし鳥博士稲荷鳥居の朱列よし
新茶くれてにこやか内田清之助

流 氷 田村すゝむ

春寒や椅子の脚より暮れてゆく
詩出来るまで春雪の中歩く
流水に佇てば足裏に海の音
春北風残り二分のロスタイム
同期会の通知が亡妻に二月尽
三寒四温死者にも月日流れけり
犬ふぐり別るる時も握手して

夜据糸の鷹

瀬戸 悠

笹子鳴く島に火の見と灯台と
助六の毗あをき羽子板や
ブランコの鎖垂直寒に入る
女正月天金の書の清しさよ
牡丹雪棺にふれて消えにけり
風花の磴百段を社殿まで
降る雨に夜据糸の鷹の羽ばたける

夜据糸、一鷹の羽ばたけるとして

遅き春

塩田博久

煙突は煙ますぐに冬あたたか
梅日和茶店に鳴つて風の旗
ぶちまけて払ふ小銭や冴返る
春の雪積もる名残の寒椿
啓蟄や薔薇の名前を書き直す
露のたうバス終点に直売所
ローカル線の硬き切符や梨の花

吊し雛

代田青鳥

子の代で終る家系や吊し雛
春めくや話相手といふ介護
はこべらや自転車通勤せし小径
読みかけの本ばかり積み二月尽
淡雪や忘却といふ神の業
はこべらや園児の列のすぐ崩れ
旅に出てまた春愁のはじまれり

涅槃吹

田中佐知子

掴み出す楮かどよりこぼれ春氷
涅槃吹振れて乾く楮かな
瓦斯屋来てボンベ取り替ふ斑雪村
葉売り春炉に薪を継がれぬて
巡礼の旅の始めの蝮の道
山城の揚羽蝶紋風光る
日脚伸ぶ潜りしままのかいつぶり

雪卸し

工藤ミネ子

青空は根の国なるや雪卸し
雪卸し見上ぐるに足仁王立つ
雪卸す夫若やげる青き空
屈強に老いたり雪を卸しつつ
仏の名冠す村あり雪深く
生きてゐる証し戸口の雪を掻く
太陽の機嫌なひ交ぜ春動く

座禪草

—岩木 茂—

春めくや名のある松もなき松も
座禪草おのおの己が坐に就きぬ
杳として残雪の嶺鳴鳴けり
余呉遅春わかさぎ釣に賑はふも
水の面を空の流るる座禪草
鏡湖に雪棹ひとつ傾きぬ
古草や雪の下なる古戦場
座禪草地より五寸の日の匂ひ
てのひらに乗りさうな風初蝶来
さくらの芽万年鮎に舟の出で

山河集

同人作品



神蔵 器選

風邪籠りゐて久女忌の過ぎにけり

林 いづみ

春兆す比奈夫翁のこののはに
春立つやフェルメールブルーのかがやきに

冴返る和紙工房の十斗釜
耳門より入る静寂や牡丹の芽

山肌に水滲みくる百千鳥

浅田 光代

冴返る茶筒隠れの磔刑像
浅春や埴輪の巫女の首飾り

千回 目春 一番の櫂かな
紅梅に言葉ほぐれてきたりけり

ものの芽の一つに佐保の朱唇仏

雨宮 桂子

山菜莢の花みささぎをのぼりゆく
西行庵に切り株二つ春隣

回廊の緋衣の足音牡丹の芽
ほとけ顔して二月堂の孕鹿

大寒や山は端坐をくづさずに

土井 三乙

織月の空より雪の舞ひ始む
大黒についで用のや日脚伸ぶ

銀杏冬木箒持ちたる巫女の立つ
海鼠嚙む老いは齒よりと思ひつつ

灯の入りて変はる遠近春隣

柿沼 盟子

春立つや裏彩色の木版画
一丁目の端ゆく銀座に春の霜

新旧のもの匂ひたつ雪間かな
おととひの雪を根方に梅ふふむ

◇特別作品◇(抄)

春の動物園

竹生田勝次

「パンダ橋」「イソップ橋」や春うらら
水温む小惑星のごとき河馬
てふてふのとんで麒麟の高さかな
コンドルのアンデスの春想ひけり
風光る象のすばやきあと退り
愛称で呼ばる蟻食のどけしや
犀の角帽子掛によし目借時
ライオンの迷惑顔の遅日かな
春の暮さびしき猿のそびらかな
いてふ芽吹く子規球場のネット裏

風土独語／神蔵器



一村は生絹の中や臘月

天野みゆき

千回目春一番の櫛かな

浅田 光代

生絹はまだ練らないままの絹糸である。「糸を練る」ということは、はじめに糸とりとか糸繰りといった作業で、繭から一本一本糸を引きとり、数本をねじ合わせるようにして、丈夫で長い一本にして巻き取り、それを灰汁（あく）という灰に湯を入れてしばらく放置した上澄みの液を利用して煮ると、糸の表面を覆っていたセリシンというたんぱく質が取れ、あのきれいな輝く糸になる。この作業を「練る」といつている。

作者の現住所は相模湖与瀬になっているが、旧名は津久井郡牧野村で四方山に囲まれた台地である。田圃は一枚も無く、陸稲を主食とする養蚕農家である。養蚕は春蚕、夏蚕、初秋蚕、晩秋蚕と年四回出来るので、仕事は厳しかったが、唯一効率のよい産業であった。

現在はまだもう養蚕農家はなくなっているようだが、年を取れば取るほど生れ育った若い頃がなつかしくなるのではなからうか。シルクのような美しい高級感はないが、かえって生絹の素朴な色、少し硬めの感触、自然のもつ美しさ、やさしさ、それはあたたかも繭の中に在るごとく、やすらかである。

掲出句の櫛は、大阪府能勢町野間稲地に在り、かつては「蟻無宮」とよばれた神社の境内にあつて、神社の御神木であつた。名称「野間の大ケヤキ」、樹齢一〇〇〇年、幹周十四メートル、樹高三十メートルで国指定天然記念物になっている。里人は大櫛の春先に出る新芽の出具合で、その年の豊凶を占つたという。

さて、この句の問題点は「千回目」である。ケヤキのもつとも美しいのは連休も少し前の若葉の頃である。しかし、若葉はたしかに美しいが、これは絵になるが、俳句では弱いのではないか。ケヤキでもつとも大事なのは芽吹きである。特に大櫛になれば全体の管理維持もままならないであろうに、何万何十万とも知れぬ細く小さな枝の先々の新芽にまで充分な水分や栄養を送り育てることは至難なことである。

春一番はそんなケヤキを励まし、手荒いがこれも愛の鞭、叱咤激励している。千回の春一番は千年櫛の歴史であり、千年櫛の誇りでもある。（以下略）

風土集



神蔵器選

解く帯の渦に身を置く寒もどり

相模原

天野みゆき

一村は生絹の中や臘月

一と筋の道あやまたず鳴雪忌

一喜して一憂消しぬ紅椿

六無齋言ひける人よ春遅々と

馬飼野は右府の牧とや雪蛭

藤枝

間島あきら

鷹上る四囲に連山したがへて

焦げ臭きいろに燃え立つ冬薔薇

手水三尺法然院の冬椿

久女恋ふ色に炎す冬紅葉

下萌や指一本の電子辞書

東京

奥田茶々

紅梅や浅草めぐるパンダバス

針供養針にも心ありにけり

聖天のお下がり大根もらひ来る

走り根につまづく鞍馬春寒し

浅春や白波沖へ沖へ立つ いわき

森高 武

声かけてみれば白鳥鳴き返す

釣り上げし鱗五寸の光かな

山々のまとふ淡雪日を返す

春の雪光の中を落ちにけり

紙漉の水一枚を重ねつつ

さいたま

須藤美智子

春めきて角のとれたる雑木山

火の猛る野火見し夜の渴きかな

春めきて花屋の前に水流れ

早春のランプシエードの和紙明り

冴返る杖の先々光りけり

東久留米

竹久みなみ

たんぽぽの上に日本の地図ひろぐ

一日中雨降ると言ふ花菜漬

春寒し足のくるぶし被ひけり

音もなく人もぬなくて雀の子